

## 精神的な不調を感じた学生が精神科治療を継続するまでのプロセス —福祉学科卒業生へのインタビュー調査から—

○ 目白大学 鹿内佐和子 (9130)

谷口恵子 (東京福祉大学・9122)、姜壽男 (東京福祉大学・8504)

キーワード：大学生 精神科治療 TEA(複線径路等至性アプローチ)

### 1. 研究目的

日本学生支援機構の「平成 28 年度大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援における実態調査報告書」によれば、障害学生数は増加しており、特に全障害学生数 27,257 人に対して、精神障害学生は 6,775 人(24.9%)在籍し、障害種別では病弱・虚弱学生に次いで 2 番目に多い。障害者差別解消法により、「教育における合理的配慮」は国立大学では法的義務、私立大学では努力義務とされ、精神疾患を有する学生の教育は養成機関の大きな使命となっている。しかしながら近年増加している精神障害を有する学生への具体的な支援方法に関する研究は少なく、個別対応がなされている現状がある。

筆者と共同研究者は、精神疾患を有する福祉学科の学生が精神疾患ゆえの体調の波や疲れやすさなどの困難を抱えながら、どのような環境やサポートがあると実習等の課題を乗り越え、仕事に従事していくのか明らかにしたいと考え、これまで研究を行ってきた(谷口,2016)(谷口,2018)(鹿内,2018)。その結果、病院初診時は、家族のサポートや病院スタッフの関わりによって、課題の多い精神科医療体制や精神疾患への偏見にも関わらず、病気や障害と付き合い、前に進む力になっていたこと、そして、自身の病気の体験から福祉系大学に入学し、教員や同級生の影響を受けながら学びを深めていたこと、福祉実習前に自分の病気や障害について実習先に知ってもらい、利用者からの肯定的フィードバックを得る、実習課題を達成したなどの実習体験から自信を得て、福祉職に就いたこと、就職後の体調不良や利用者・同僚との関わりなどから自分なりの生き方を模索すること、が明らかになった。

「病気や障害と付き合い」ことは病気や障害を持ちながら生活していく土台となるが、学生が精神科に受診をするまでには、葛藤やとまどいがあり、時間を要することを教員として実感している。そこで、精神的な不調を感じた学生が、精神科に受診し通院治療を継続するまでには、どのような経験があり、どのようなことが後押しや阻害になったのか、さらに、どのような支援が必要なのか明らかにしたいと考え、研究目的とした。

### 2. 研究の視点および方法

大学在学中に国際疾病分類第 10 版 (ICD-10) に規定される精神および行動の障害のいずれかの診断名にて精神科に初診した卒業生 3 名を対象にインタビューを行い、逐語録を作成し、TEA (複線径路等至性アプローチ: Trajectory Equifinality Approach) にて分析を行った。

TEA は「ある主題に関して焦点をあてて研究をする時に、人間の行動、特に何らかの選択とその後の状態の安定や変化を、複線性の文脈の上で描くための枠組み」そして「個々人がそれぞれ多様な径路を辿っていたとしても、等しく到達するポイント（等至点）があるという考え方を基本とし、人間の発達や人生径路の多様性・複雑性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデル」\*）である。「精神科治療を継続する」を等至点とし、そこに至るまでにどのような径路（ルート）をたどり、ルート選択の過程で対象者の信念・価値観の変容に影響した社会的方向付け（等至点に向かうのを阻害する力）と社会的ガイド（等至点への歩みを後押しする力）を見出し、学生支援で求められることを明らかにしたいと考えた。TEA においては、4±1名を対象とすることで、経験の多様性を描くことができるとしているため、3名の分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

本研究は「日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守し、実施した。研究協力者には、文書および口頭により、研究目的、調査の趣旨、データの扱いなど（録音・逐語録・プライバシーの配慮・研究成果の公表・論文化など）、調査協力は自由意志によるものであること、同意後も途中撤回ができること、質問内容によって回答拒否しても不利益を被らないこと等について説明を行い、同意書に署名を得てインタビューを実施した。

### 4. 研究結果

精神的不調を感じた学生は、自身で何とかしようとする取り組みながらも、対処できずに精神科に受診しようと思うが、実際に受診するには家族や教員が同行するなどのサポートが必要であった。また、受診時に精神科医がじっくりと話を聴く姿勢や適切な助言があると通院を継続し、そうでない場合は転院をしていた。学生生活や仕事をする際にも、医師やソーシャルワーカーなどの専門家の適切な助言や見守り、家族の見守りがあること、実習先や職場の相談しやすい環境があることが、病気と付き合い、大学の実習や仕事に取り組む支えになっていた。

### 5. 考察

精神的不調を感じた学生は、不調を周囲に気づかれないよう頑張っていることもあるため、家族や教員など周囲が気づいて、話を聴く、受診を検討する、受診先を探し同行するなどのサポートが必要である。受診した後も、主治医との相性が合わない場合などは、転院を調整する必要がある。大学の学生支援では、授業の欠席・遅刻が続いた際に面談し、本人がつらさを吐き出せるようじっくり話を聴き、不眠や抑うつなど心配な症状があるときには、本人の了承を得た上で、家族や関係機関と連携しながら医療機関につなぐ体制が必要だと考える。

#### \*引用文献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ 「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」 立命館人間科学研究 25 2012. P. 97